ENEOS

グローバルな社会、包括的な世の中、世界は変わっていこうとしている。
富士鐵工所も、アメリカにインドネシアに工場を建てた。富士鐵工所水窪事業所ではインドネシアの工場と比較され生産性を上げろと尻を叩かれた。能率を上げろと。
富士鐵工所水窪事業所、その製品加工の現場では、一つの製品を造る行程があり、作業者がその一つの製品を造り終えたら、その工程を廻り終えたら、その行程の上にある電光掲示板に、その数がカウントされる。
技術職の人が作業者の動き分析し、より簡単に、より快適に作業できるように考える。それは、直接作業している人も、自分の作業現場を改善し、能率を上げ、怪我のない快適な、誰でもできる現場を目指し、考える。それは提案と言う形でも、提案件数も、それぞれの従業員に月に何件とノルマとしてとしてあたえられる。
半場の仲間が建設関係の仕事で働いている人が、富士鐵工所水窪事業所に来て従業員の働いている現場を見て。
「俺には、このような仕事はできないナ～」と言った。

私が水窪事業所に帰る前、本社での勤務のとき、今までの年功序列を改め、これからは実力主義で行くのだ、そんな話が広がった。日本の国技、相撲の世界を例にとり、実力さえあれば横関にも横綱にも昇進できると、会社の広報でイラストを交えて説明していた。
水窪に帰ってきて、水窪事業所で働いて、思った。本社とは違い古い機械が多かった。それでも、その古い機械を磨き、能率を上げるように頑張った。工場内は整理整頓され通路もピカピカに磨いた。本社から管理職が能率協会の人と水窪の工場を視察に来るからだ。その人たちは白衣を着て工場内を見回っていた。

そんなときから数日たって、私は金属熱処理の技能検定の勉強のため本社湖西の工場に車で行った。課長の配慮で出張扱いにしてもらった。
有り難い事です。車に乗っている時間、本社に行って、昔働いていた熱処理で、なつかしい人と会う時間も、仕事として成り立っているのだ。本当に本当に有難い事だと思った。課長に感謝だ、と。
懐かしい熱処理の現場に顔をだし、なつかしい人と話した。昔とは大分様子が違うようだ。技術職・事務職として採用された大卒の方も、その熱処理の現場で働いているという。
「現場に落ちた大卒は、ほとんどの人が続かなく辞めていく。あいつも何時まで続くか」と、そんな大卒の人に目線を向けて私にタケシさんは、そんなこと話をした。
年功序列廃止以来、現場では同じ汗をかく仲間なのだ、そんな意識は薄れてきた。トミオさんは呟いた。

技能検定、金属熱処理、テストピースの磨きの練習、ピカピカに磨いて、組織を顕微鏡で覗いて。それなりの金属熱処理の勉強をした。
それが終わって工場内を、昔、懐かしい友を探して回った。上の工場の加工現場で知り合いが働いていた。そこでＮＣ旋盤（コンピュータ工作機械）から出たキリコ（加工して出た鉄くず）をカギ棒と手ボウキを使って掃除していた。数台あるＮＣ旋盤に製品を取り付ける仕事はフナック（産業用ロボット）、ＮＣ旋盤の加工が終わると、そのフナックが加工し終わった製品を取りだし、レーンを移動し次のＮＣ旋盤に持って行った。
私には、その光景が、まるで昔見た、映画ターミネーターの世界だと思った。今から３０年前の話し。作業現場の無人化は進んでいた。
それから数年たった
１９９１（平成３）年、その富士鐵工所はフジユニバンスと社名を変えた。

「トライアスロンをやらないか」とユキは私に囁いた(怖)
大きい大きい天竜川、それを前にして育ったユキは泳ぐのは得意だという。小さい小さい大沢（おおさ～）、私は泳ぐことは得意ではなかった。

袋井クラウンメロンマラソンに参加しようと車で袋井に向かった。そのマラソン大会は、元は袋井商業高校をスタート・ゴールにしていたけど、この年から、小笠山総合運動公園内エコパスタジアムが発着点になった。マラソン大会は人気が出て年々参加者が増え女性の参加者も多くなってきた。私は佐久間から前日、車で袋井に行き、車中泊をしようと考えた。夕方は、袋井に家を建てたユキと出逢い夕ご飯をファミレスで食べた。そのときユキからもらった本「月刊トライアスロン」

トライアスロンやってみたいけど、泳げない私には無理だ。そんな雑誌を見ながら車の中で一人眠りについたZZZzzz。

そんなとき、富士鐵工所はフジユニバンスと社名を変えた時代、バブル景気が、そこを着いたとき、愛知県の鳳来町に湯谷温泉に「鳳来ゆーゆーありいな」ができた。そこには２５ｍの温泉プールがある。私は、そこに通った。自転車も乗った。通勤バイク、バイクパンツをはき、佐久間町の半場から水窪のフジユニバンスまで約２１㎞を走った、トレーニングの厳しさより田舎の人の目が恥ずかしかった。

目標はトライアスロン伊良湖（Ａタイプ）７７㎞・スイム２㎞、バイク５５㎞、ラン２０㎞

その大会の数日前の日曜日、私は佐久間から車で田原町まで行き、そこに車を置いてバイクでトライアスロン会場である伊良湖に向かった。炎天下で道路には無数のミミズが干からびで死んでいた。伊良湖につき大きな曲がったホテル、その前のビーチ、その横のテトラポットの上に立ち、スイムのコースだという海を眺めた。

遠く遠くに、果てしなく遠くに、赤いブイが霞んで見えた。あそこまで５００ｍ、そこを二往復、はたして自分が、こんな距離を泳ぎ切ることができるだろうか。不安な気持ちが自分の心に沸いてきた。しかし、もう矢は放たれた。やるしか、ない。

大会前日、ホテルで前夜祭があった。地元、福江高校のブラスバンド部がトライアスリートを歓迎する歌が披露された。

大会当日、バイクをトランジットにセット着替えバイクシューズもそこへ置いた、受付で名前を掲示し、左腕に、ゼッケンナンバー２５５を油性のマジックで書いてもらった。

スタッフが「頑張ってください」と言った。

ウエットスーツに着替えバーコードをだし。チェックを終えてビーチの一部、網でかこった区画に入る。もうスタートするしかない。心臓はバクバクだ。そんなとき佐久間中学校の同級生、ユキから声がかかった。「ガンバレよ」と。

１９９５年私の初めてのトライアスロンは、伊良湖にある曲がったホテル、伊良湖シーパーク&スパの前のビーチから、号砲と共にスタートした。手が足が、他の選手の手や足や胴体にぶっつかる。バトルというやつだ。心を落ち着かせた、無理に進まない。バトルを避けた。周りには大漁旗を上げた漁船が何艘も浮いている。一つ目のブイに着くころには周りの人影は少なくなっている。自分のペースで泳ぐ。ウエットスーツの浮力に身を任せて泳ぐ。スイムが終わった。４７分５２秒、次はバイクだ。ウエットスーツを脱ぎ、ヘルメットを着け、バイクシューズを履いてバイクのコースに進んだ。スイムで疲れた身体だが、次のバイクではなぜか頑張れてしまう。それはお酒のチャンポンのように、ビールを飲んでいて酔っ払って、もう飲めない、と言っても、水割りに変えれば、また飲んでしまう。そんな感覚なのか。

ここ伊良湖のバイクコースは周回コースだ。高速のエリート選手の走りも目にすることができる。速い人は速い、遅い人は遅い。それでもイイ。それぞれの実力があるのだ。

エリート選手の女性が、引き締まったお尻を左右に揺らしながら立こぎで遅い私を抜いていった。クソと思いペダルに力をこめ漕いでいくが、着いていけない。お尻は遠のくばかり、これが私の今の実力。追うのは止め、ただただゴールを目指す。バイクが終わり最後のラン２０㎞、伊良湖の海岸沿いを走る。伊良湖灯台を過ぎたころ、太平洋が広がる。最初のエイドで水をもらった。少し塩辛かった。水平線が海のかなたに見える。

波の音が同じ感覚で耳の奥に頭に中にテンポよく響き聞こえる。

私の腕も足も呼吸も心臓も、同じリズムを繰り返す。
伊良湖の灯台に帰ってきて、折り返す。ゴールはすぐそこだ。
自分の身体は「泳ぎ」「自転車に乗って」「走り」今ゴールに向かっている。まるでビールを飲んで水割り・日本酒・焼酎と続き泥酔いして記憶を失った酔っ払いのように。トライアスロンの三種目も最後のラン、身体は疲れ切っているはずなのに、泳ぎ・バイクで走り・自分の足で走り切って辿り着いたゴール近くでは、何故か最後の力が湧いてくる。
「ゼッケンナンバー２５５番、佐久間町からおこしの新間さんゴールは後少しです。頑張ってください」
女の人の甲高いアナウンスの元、１９９５年トライアスロン伊良湖のゴールに私は飛び込んだ。
初めてのトライアスロン、トライアスロン伊良湖（Ａタイプ）
７７km・スイム２km・バイク５５km・ラン２０km
スイム　　４７分５２秒
バイク１時間３８分２２秒
ラン　１時間４８分４５
総合　４時間１４分５９秒
自分で自分を褒めてあげたい。当時の自分も、それまでの自分も。今の自分も。
トライアスロンを完走してバーンアウト的な燃え尽きた気分を味わい、数日後、半場の家の郵便受けに一通の手紙が届いた。袋井市愛野、ユキからの便りだった。私の初トライアスロンの写真だった。そのときを思い出し懐かしく見た。持つべきものは友達だと感謝した。その中の一枚に、トランジットで、バイクの準備でヘルメットをかぶろうとしている、綺麗な女性の写真が一枚あった。
私は、そのときのスイムから上がったトランジットを思い返した。多くのカメラマンがいた。カシャカシャカシャとシャッター音が鳴り響いていた。カメラのシャッターを切る音は心地よかった。そのカメラのレンズの多くは女性に向けられていた。かがんだオジサンたちは下から選手とバイクを撮影していた。ユキもそんな気持ちでシャッターを押したのかなと思い、電話で訪ねてみた。
「その写真、もう一度、よ～く見てみなョ」
そんなユキは、こう私に言った。
もう一度よく見たら、その綺麗な女の人の右腕の手首から上が、無かった。

トライアスロンはハワイが発祥の地だという。最初の始まりはアメリカの軍人たちが、酒の席で、ホノルルマラソン、ワイキキ2.4マイル・ラフウォータースイム、アラウンド・オアフ112マイル・バイクレースという3種の耐久レースのどれが一番過酷なのかという話から、それでは三種目一緒にやってみよう。という話に発展し始まったと言われている。
そのトライアスロンをやる人たちの聖地といわれるハワイ・コナ、そこではアイアンマンハワイが行われている。トライアスロンをやっている人は、みんなが憧れる聖地だ。
アイアンマンハワイは水泳3.8キロ、自転車180,2キロ、フルマラソンの42.195キロの距離の長いレースだ、そのレースは、総合順位もつくが、早くから5歳刻みの年代別の表彰がある。豊橋にも７０歳で、そのレースに参加した人がいる。そのIRONMANのテーマは「Anything Is Possible」。何でも可能です。性別も年齢も障碍者の人も同じ時間にスタートし制限時間内に帰ってくれば，皆、勝者なのだ。
私の知り合いに、７０歳の時そのレースに参加した人がいる。その人を応援するためにツワーを組んだ人が掛川にいる。私より一回り年上の人だ。
日本は政府を挙げて生涯スポーツを推進している。私は、そんな人を応援する気風がもっともっと広がって、応援する人も応援される人も楽しく感じればいいのではないかと思っている。

半場に越してきて、夏祭り中部の祭りで酒を飲んでいた。なかっべの～祭りはジャンジャンぶ～りよ♪。そんなとき、酔っ払っているとき、家から電話が来た。母親からだ。

「政彦が血を吐いて病院に運ばれた」と。

オートバイ部品の営業職の兄、きっと胃潰瘍かなんかでの吐血ではないかと考えた。仕事はきついけど気ままな現場仕事で良かったとも考えた。家に帰って、そんな話をしたが。

母親は

「どうも、そんな病気ではなさそうだ」と言った。

次の日、義姉が子供と一緒に半場の家に来た。私たちは、その義姉と義理の兄と母親と父親で兄の運ばれた埼玉県の獨協医科大学病院に車で向かった。

点滴を打ってはいたが、笑顔があり、元気そうな感じだった。ベッドで横になる兄と話していると、ドクターと看護師がきて少し兄と話し、それが終わってから、目であいずした。お話しがあるみたいだ。

義姉と義理の兄と母親と父親は、その話を聞きに行ったが、私は行かなかった。兄と、もう少し話をしたかった。ちょうどパソコンを買って、そのパソコンのことを話したかった。家族新聞「エンドルフィン」兄に見せた。英語のスペルが違うと兄に言われた。そのうち兄はベッドでスウスウ寝息を立てて眠ってしまった。

私は車に帰り、運転席で目を閉じていた。しばらくたって、そこに義理の兄が帰って来た。

タバコに火を点け、その煙を吸うと、義理の兄は言った、

「末期の癌だそうだ。」と。「もって三ヶ月・・・だと」と、私に話した。

父や母、義姉たちは、その兄政彦の病室にいるという。その兄と話しをしているという。私たちも病室に向かった。私は病室の入口で、みんなの話声を、ただ聞いていることしかできなかった。

帰り真夜中、車で甲府に向かった。義姉を甲府の家の前で下ろし、それから高速を走り、飯田のインターで下り矢筈トンネルを抜け兵越峠を越え草木トンネルを抜け、静岡に入り水窪・佐久間、西渡の辺りを越え道が曲りくねっている辺りで、母親の嗚咽が漏れた。

「なんで政彦が」

まだ三十代後半の私は、母親に温かい言葉をかけることはできなかったかもしれない。しかし、一緒にいることで、なんらかの力になったのかもしれない。自分も辛かった。

その兄は甲府の病院に、転院した。佐久間から甲府へ親戚の人と行った。母親の兄妹、上村の鈴木家で一番最初に生まれた、私の母親久代は、ひさね～と呼ばれていた。そんな言葉が車の後部の席で響いた。

時は進み、季節は夏から秋になった。兄は腹水が溜まり辛そうだった。

人は生れ、やがて死んでいく、それが人生だ。

映画「最高の人生の見つけ方」での俳優モーガン・フリーマンのセリフだ。

故永六輔さんのお話で人は二度死ぬとある。一度目は「肉体が死んだとき」2度目は「みんなから忘れられたとき」と。

人は忘れ去られないように墓標を作る。過去からの物語を、先祖からの繋がりで今があるのだと教えるために親は、神になった、亡くなった先祖に、手を合わす。

秋が深まり。甲府の荒川沿いの遊歩道で父親と散歩の途中、その父親が、私に話した。

「政彦は信士にした方がイイ」と。

私は何もわからなかった。

それを知った、母親が、怒った、泣いた。新間家は代々上座だ、なぜ政彦が信士に下がらなければいけないのか政彦がかわいそうだと。

私は口をはさむことはできなかった。争うことの嫌いな父親は、母親の言葉に従った。その後問題が出てきた。

私は考えた、どうも死者に「位」があるようだ、と。

それまで、新間家の墓は、横吹にあった。その墓は、隣村、島の神社の下にあった。その墓は土葬で、墓らし

い墓、そんなふうに感じた。まるでゲゲゲの鬼太郎に出てくるような墓だった。墓には、葬式で使ったのだろうか、死者をいけた盛り上がったところに鎌やトウバが刺してあった。そこにその人が眠っている。正に、そのように感じる墓だった（土葬だし）

父親が、その墓を、相月の御寺に、横吹の墓を移した。横吹の、その墓らしい墓、ゲゲゲの鬼太郎に出てくるような墓、そこに相月の御寺の和尚さんと行き閉眼供養（魂抜き）でお布施を和尚さんに包んだのだろう。私の記憶にはない。一人でやったのか定かではない。時間の使い方は、そのまま命の使い方になる。父剛は、自分の命を横吹に行って使ったのだろう。そして相月の御寺の下に、その新間家の墓は移された。魂を入れた。その隣にもう一つ。

兄政彦はその年の秋、甲府で葬式を挙げた。甲府市の火葬場だった。そして、その、もう一つの墓に、遺骨は納められた。相月の御寺に上る階段の脇に、秋の風に揺れる百日紅の花が咲いていた。

横吹に暮らすとき、父親は

「お墓は、あまりきれいにするもんではない」

と教えられたみたいだ。墓が綺麗だと葬式があったと思い縁起が悪いから、と。

しかし、その墓を相月の御寺に移動してから

「墓は綺麗にしておかなければならない」

と考えが変わった、細木数子がテレビで、そう言っていたからと。

その父親は、せっせと、せっせと、その墓を磨いていた。今はその父親もいない。

ある日、仕事から帰ってきて、相月の御寺にお墓参りに行こうと、勝木さんと佐々木さんの間の駐車場に線香や香の花などを持って歩いているとき、隣りのナッチャンが、しゃがんで草取りをしていた。

忙しそうな私に、ナッチャンが言った。

「生きている人の。つとめ！」

つとめとは【勤め／務め】

1 当然果たさなければならない事柄。任務。義務。「税金を納めることは国民の―だ」

2 官公庁・会社などに雇われて、働くこと。勤務。「一日の―を終える」

3 仏道の修行。また、僧侶が日課として行う勤行ごんぎょう。「朝夕の―を欠かさない」

4 遊女などが稼業として客の相手をすること。

「あの娼妓は、あなたにゃあ―をはなれた、仕うちでげすぜ」〈魯文・安愚楽鍋〉

5 遊女の揚げ代。また一般に、支払うべき金銭。勘定。

「四十ばかりの女、…―をとりにきたり」〈滑・膝栗毛・六〉

【類語】(1) 任にん・任務・義務・責任・責務・本務・使命・役目・役やく・役儀・分ぶん・本分・職分・職責・責め・課業・日課／(2) 勤務・仕事・労働・職務・作動・稼働・起動・勤労・作業・労作・労務・労役・実働・働き・勤続／(3) お勤め・勤行ごんぎょう・看経かんきん・読経どきょう・礼拝

原文ままWebコトバンクから。

「生きている人の。つとめ！」そう、死ぬということは、その人は何もできなくなるということ。生きている人は、つとめをしなければいけない。ナッチャンに教えてもらった事。

夏の暑い日、森町三倉「勉強会」で、萩田さんが「御寺でもらった」と、ウチワで扇いでいた。そのウチワには『生きているということは、誰かに借りをつくること。生きていくということは、その借りを返してゆくこと』こんなふうに生きなければならない、と言った。萩田さんに教えてもらった事。

（ナッチャンとは横吹から来た元気のいいオバサン。萩田さんはマラニックの師匠）

佐久間に帰ってきて、半場に越してきて、村の付き合い、地域の付き合い、ＰＴＡ・子供会、様々な関係の中で揉まれて育った。中でも消防団・若連は良い経験だったと思う。

若連は、その地域の祭りを仕切る。半場の若連はヒロが連長として仕切っていた。寄付集め祭りの準備、その他。

ヒロは私の一年前に半場に帰ってきたという。半場で育ったヒロは活動的だった。連長の仕事もテキパキとしていた。私もユニバンスの仕事から帰ってくると協力した。そして祭りは始まった。

半場の祭りは、一部の人は来るが、来ない人もいた。ユキの実家は集会所の隣なのに来なかった。寂しさを感じた。しかし、それにはそれなりの理由があるのかとも思う。

半場の祭りは、若いとき一回だけ遊びに来たことがある。中部や佐久間のお祭りに比べ、派手さはなかった。屋台もなかった。テキヤもなかった。横吹の祭りと似ているのかもしれない。と思った。

半場の祭りには、物語がある。半場の大日神社を、「聖様」、さくま昔ばなしからの物語が、それが連綿と続いている。今の私たちは、それをどうするか、岐路に差し掛かっている状態だ。

半場の夏祭りが終わり。秋に差しかかった頃、半場消防団第七分団で佐久間駅伝の話があった。

その話はキーチャが消防団の分団長のときだった。

「佐久間駅伝の地元参加が少ないので、本部から要請が来た」と言った。

半場第七分団からチームが結成された。ヒロ・せいごチャ・ふるチャ・びと～ン・マーボー・私、でチームを作った。練習は夜七時半、佐久間小学校横消防器具置場前に集合、そのときは楽しかった。分団長キーチャが選手にユニホーム買ってくれた。白のランニングだ。中部のスポーツ店イズミ屋で買ってくれた。私は職場での佐久間駅伝の参加を断った。地元優先とした。

ＰＴＡでは次女が幼稚園の年長組で、平成１１年度のＰＴＡ会長をやらせてもらった。それは、とうじ、ＰＴＡの会長は「中部地区」「佐久間地区」「半場地区」と廻っていた。それが、その年は半場地区の番だった。半場地区には幼稚園の年長さんは二人、もう一人の年長さんは学校の先生の子だった、そのときは、その時代は「学校の先生は役をやらない」暗黙の決まりがあった（今考えると変）だけど、そんなときだった。そして私がシブシブ引き受けた。もとい、有り難く引き受けた。

副会長は中部地区の人と佐久間地区の人だった、本当は、そんな二人にやってもらいたかったけど、決まりだからと私になった。

当時の佐久間幼稚園の園長さんが言うには

「今年は、用事は少ない」との話だったが、蓋を開けてみれば、佐久間幼稚園は佐久間の代表で、静岡県の西部地区でも代表だった。天竜の学校、浜松の学校、いろいろな学校に行ってきた。

夜勤があり、会合に参加できない時もある。そんな時には、頼もしい副会長が代わってくれたりもした。感謝です～。

ＰＴＡでの経験は、その一年は、いろいろ勉強になった。出会いもあった。伊豆の長岡での会合のとき班に分かれた分科会があった。それぞれのＰＴＡの発表で、その地域なりの取り組みがあった。春野町のある学校では入学者がいない為、ヤギを一年生として迎えた。そんなヤギの一年生の入学式の様子をＯＨＰを使って発表していた。

都市部の高校のＰＴＡでは、荒れた学校のこと。万引き・暴力・売春・レイプ、そんな話だった。幼児教育、小学校教育の大切さを語っていた。日本の性教育、メディアリテラシーの話など。

差別、同和問題の話もあった。私は同和とは、この時まで知らなかった。気にして無かった。同和問題（部落差別）それは湖西にもあった。あの村の人たちとはと、ひそかに私に話す人もいた。水窪にも母に訊いたクダショウの話し。母親は子どもの時そのクダショウをみたと言った。ハッキリ言った。それは、観た。のではなく、

みえたのだろう。人の見え方には、目で見て、それを頭で処理して、認識する。頭の中にクダショウが支配していれば、ネズミでもネコでもクダショウと認識する場合がある。

そんな会合を終え、夕方の宴会では大広間に数百名の御膳が並んでいた。多くの先生方、多くのＰＴＡの役員、それぞれの熱の入った話しがあっただろう。参加者には胸に名前と学校名が書かれている。隣に座った、女の人が、私の名札を見て、「佐久間ですか、私も佐久間にいたことがある」と言った。半場ですと答えたら、「半場にもいたことがある」と言った。

案会が終わり。二次会に行く人は上の階のスナックへ。との案内があった。私は同じ部屋になった、伊豆の和尚さん、伊東の役場の職員の人、岡部町のベンツに乗った会社の社長、らと連れ立って、そのスナックに向かった。カラオケで歌ったり、その音楽に合わせて踊ったり、芸達者の人が多かった。静岡農業高校だという女の人二人組は、宴会の花形だった。

そんなことを知る由もなく、幼稚園年長組の、その私の娘は「幼稚園に行きたくない」と登校拒否状態が続く。夜勤明け、手をつなぎ一緒に幼稚園に行き、幼稚園で娘の遊びを遠くで見つめ確認し、・・・・・コッソリ帰って、それから寝る。そんな日が続いた。

平成１１年は年末を迎えた。忙しかった一年間も時間は続いていた。命を燃やし走り続け、ココまでたどり続けた。年の暮れクリスマスの日、佐久間幼稚園のＰＴＡ会長にはサンタクロースに仮装して園児にプレゼントを配る。そんな行事があるそうだ。夜勤明けで、佐久間幼稚園に裏口からコッソリ入って、応接室に行った。用務のお姉さんがお茶を入れてくれた。チョット緊張。会場では佐久間小学校の校長先生の挨拶が、その話声が聞こえる。私はサンタクロースの衣装を着て脇にしゃがんで待機していた。園児がサンタクロースを読んでいる。「サンタクロースさ～ん」「サンタクロースさ～ん」「サンタクロースさ～ん」

三回目の呼び声で登場してください。とのことで三回目を数えてから壇上に登場した。園児たちの質問に答え、園児たちにクリスマスプレゼントを一人ひとりに配り、

「それでは、サンタクロースは夜勤があるから帰って寝ます」と言って佐久間幼稚園を後にした。

富士鐵工所水窪工場に出勤、その夜は寒かった。仕事を終え、外に出ると雪が降っていた。深々と。その雪が降る夜空を見上げた。

「雨は夜更け過ぎに雪へと変わるだろ～♪ファファファファ～」と歌った。

後ろか来たアキラが言った

「シンマさんに一番似合わない曲ダ、ハハハ」と笑われた。

アキラは高周波の仕事で、私の横で働いていた。水窪祭りがあるからと私に言った。

「ムードンコ一枚ほしい」と。

「去年チャンスだったけど」と。

「一ダースあっても使い切れないから」と。

後輩の頼み、

「承知しました」と一枚持ってきた。

水窪祭りが終わり。アキラは

「使わなかった」としょぼくれて、その一枚を返してくれた(笑)

次の年平成１２年、西暦では２０００年、コンピュータの２０００年問題が心配されたが、大きな問題は起こらなかった。その年から介護保険制度が始まった。家計は火の車だった。

佐久間消防団、出初式、団長の挨拶、町長の挨拶もあった、過疎化の波、山間部の地域は団員減少に暗中模索

しているときだった。水窪町は消防団の定年延長を繰り返していた。

佐久間町の町長の挨拶があった。

「消防団の定年を延長しても、何も変わらない、対処療法にしかならない。二年延長しても、その二年は良いが、その後まで考えることが肝要だ」と。その当時の佐久間町長、その人は声もとおり、それは、それは、わかりやすく的確な物言いで聴いている人を魅了する、また身長は高く、そして神々しく光輝く頭脳（あたま）の持ち主だ。佐久間町民が誇りに感じている人だった。私も、そのように思う。今でも、そのように思っている。

「暗中模索」その意味は「手探りをしながらも前に進む」とある。過疎化にあえぐ佐久間町、そんな姿を、表すのに適した四字熟語だ。また「一目瞭然」と四字熟語ある「何かの物や事を一度見ただけで、その物や事の全てがわかること」の意味だ。

佐久間町の消防団、それなりに多くの人がいた。その消防団員の、その出初式の時の団員は寒い中、来賓その他の長い話しに絶え忍んでいる。壇上の人も、その団員を激励している。長い長い挨拶を聴き出初式を終えると、楽しみもあった。それは其々の団に帰っての新年会だった。

当時は酒を飲めた。コンパニオンも来た。消防団もまとまっていた。それで経済は廻っていた。酒も売れたし店屋もあった。

それが民主化の流れグローバルな社会、日本国民は自由を叫んでいる。平和の歌を謳歌している。消防団は時代遅れだ、そんな話が聞こえる。ある佐久間町の役場職員は言った。

「佐久間町に未来はない」「町政を見れば良くわかる、一目瞭然だ！」と。

「暗中模索」と「一目瞭然」「手探りをしながらも前に進む」と「何かの物や事を一度見ただけで、その物や事の全てがわかること」の意味だ。佐久間町は暗中模索をして頑張った。今佐久間町という行政区はないが、そこの地域が無くなって消えたわけではない。地域に暮らし続けるなら。頑張るしかない。

頑張るとは、困難にめげないで我慢してやり抜くという意味がある。また我慢とは、感情や欲望のままに行動するのを抑え堪え忍ぶこと。辛抱すること。と辞書に書いてある。

隣町、新城市では 平成１７年１０月１日 に新城市・南設楽郡 鳳来町・南設楽郡 作手村 が新設合併し、新しい新城市になったとき大きな新城市からの市長でなく、鳳来町の人が新城市長になった、今その鳳来町の人は落選して東京に移り住んだという。

ＰＴＡ会長を経験し、兄の死に、向き合った。母親という人の悲しみ、実の兄を小さなころから追いかけてきた、そんな姉の心情も分かろうとした。悲しみは家族で分け合った。私は走ることを趣味としていた。悲しい時は走った。汗と共に流れている周りの景色、汗と共に流れていくストレス、走った分だけ疲労は蓄積するが、気分は晴れてくる。

私はその年の平成１２年の年度末、長く御世話になった、富士鐵工からフジユニバンスに社名の変わった、思い出深い会社を辞めることに決めた。トラバーユすることにしたのだった。

給料は減ったが夜勤は無くなった。昼にはＮＨＫの番組を見ながら静かな昼食になった。少ない給料になっても景気に左右されない収入は、家計を握る人には生活費の計画は立てやすいのかもと思った。自分の時間に余裕ができた。

走る時間も、自転車に乗る時間もできた。しかし、記録は、思うように伸びなかった。一年後、そこの職場にも慣れた頃、仕事が終わってから、プールを利用させてもらった。泳いでから走ったり、走ってから、火照った身体を冷やすためにプールで泳いだ。そんな日が続けられる今を感謝した。

職場を変わって次の春、丁度北遠に御茶摘みシーズンが着た頃、静岡新聞で『フジユニバンス水窪工場撤退』そんな記事が記載された。昔フジユニバンス水窪工場で働いていたとき、上司が「水窪町には我が社の従業員が１００人以上いる。その家族を合わせると・・・」そんな言葉が思い出された。新しい職場での仕事が終わり、

私は泳ぎ、それが終わって走に出た。天竜川に架かる原田橋を走り、川合の道路を走っているときに、私の前方に一台の豊橋ナンバーの車が停車した。恐る恐る、その車の窓をみると、昔フジユニバンスで一緒に働いていた仲間だった。名前はヒデキ

「みんな自分のことばかりで、職場の雰囲気が良くない」と話してくれた。新聞にフジユニバンスの記事が記載されてフジユニバンスから従業員がいなくなって数日後、フジユニバンス水窪事業所の工場は取り壊されて更地になった。

月日は流れ、フジユニバンスの仲間もてんでばらばらに散っていったという。

そんなある日、昔フジユニバンス水窪事業所で一緒に働いた仲間が私の職場に来て昔話に花が咲いた。そんな仲間は私に言った。

「もう少し待っていれば、退職金満額もらえたのに、早かったな～」と。

運が良いとか、悪いとか♪人は時々口にする。私は今の環境に感謝していた。マラソン大会に行ってユキに会うことに、また走る仲間が増えていくことに。ただただ楽しく感謝しかない。と思っていた。

そう思うのは、環境が多くを占めている。職場環境、が。面白かった最初の事務長、熱狂的な巨フアンで、前日のナイターで巨人が負けると、ぶっすりと機嫌が悪くなる、本当にわかりやすい人だった。お酒も大好きで少しエッチで、酔っぱらってくるとオッパイのいう言葉を連呼して楽しい人だった。事務室の飲み会の帰り、事務の女子社員の肩に寄りかかりベロベロ帰った次の日の朝、目の周りを黒くして事務室の事務の机に座っていた。そんなハチャメチャな事務長だった。

その職場に伊豆からの事務職員が来るらしい噂が出た。素行が悪くて、困り果てての移動だそうだ、長髪でチョンマゲで、そんな噂があった。

そこで、巨人好きのちょっとエッチでオッパイ好きな、その事務長は「チョンマゲは俺が切る」と豪語していた。

その事務職員は凄かった。夏は昼間にプールに行きひと泳ぎ、そして、ガリガリの身体を天日干しに、まるで野垂れ死にしたシカの死骸のように。一夜干しのサンマの開きのように。

事務室に事務長がいない時など、その事務室はかき氷屋さんに変わっていた。その職員が持ち込みした、かき氷機で事務室に来る学生にかき氷を作っていたのだ。それは、少し前に廊下の掲示板に事務室のかき氷屋さんの宣伝のポスターを貼っていたからだ。職員室で、そのかき氷のタダ券をもらったらしい女の教師たちも事務室にやってきた。私は目を丸くした。開いた口がふさがらなかった。

そして私は、昔、湖西の富士鐵工時代の夜中、テレビ番組ウイークエンダ―での放送を思い起こしたのであった。

「新聞によりますと、ある高校の事務室で夜遅く仕事をしていて男子職員が女子職員をスパナで殴り殺害しました・・・」

ココではそんなことはないだろう。とは思ってみたが、若い人の考えには着いていけない行動がある。前職場とは大分違う。大人でいて子供のような人がいる。

その、ちょっとエッチでオッパイ好きな事務長は

「学校の掲示物は、校長の許可がいるんだよ～」と、私に小声で話した。

夏が終わり秋が過ぎ冬が来て、佐久間に雪が降った。久しぶりに佐久間に雪が積もった。生徒が裏庭に雪だるまを作った。

次の朝、私は９時３０分に出勤した。職場内はざわついていた。朝の仕事でゴミを二階に集めに行くと数人の教師が窓から裏庭を見て話していた。

「リアル」と。

私も、覗き込むと、夕べ見た雪だるまの頭が取れて落ち、その取れた部分に赤い血のような液体がふりまかれていた。正にリアル、現実的である。これが実態である。のか。

当時の教頭先生が怒った。赤い液体をトマトジュースだと目星をつけ、犯人を捜すため調査が始まった。今朝出たゴミを分析しトマトジュースの空き容器を見つけ、そのゴミの出たところを訪ねてきた。「事務室」と断定し、そして、容器を出した真犯人を突き止めたのだった。その人は厳重注意を受けたようで、涙が顔で校長室から戻ってきた。ところが夜その人と他の事務職員の会話を私は聞いて唖然とした。

「教頭、血相かいていたぜ」

「笑かすＷＷＷ」

今時の若者の心が、分からない、というより、大人として何と言おうか考えた。黙っている方が良いとも。

翌朝、普通の日々があった。そう思った。ところが、昇降口にある学校の建物のミニチュアの中に、小さな雪だるまの人形が首を捻がれて、その頭が転がっていた。捻がれた雪だるまは、その場所にマジックで真っ赤な色で塗られていた。

教頭先生が、また血相かいて飛んできた。そんな繰り返しだった。

その教頭先生は次の年、進学校に校長先生として転勤になった。その年静岡県で進学校の履修単位不足問題があり。ＮＨＫのニュースで流れていた。一番前で机に座りメモをしていた、当時の教頭先生がそこに居た。

そのチョンマゲの彼は走るのが好きなのだという。静岡県駅伝大会、佐久間町の予選に来た。彼も私も補欠として控えの選手として、その駅伝練習に参加した。そして静岡県駅伝大会の佐久間町代表として静岡市に行った。そして開会式で、その彼と一緒に静岡県市町村駅伝大会の開会式で行進をした。

その彼は兄がいて、高校の時に全国高校生駅伝大会、都往路を二人目指していたという。兄は、そこを走ったけど、私は走れなかったと。

巨人好きの事務長が転勤し、次に来たのはサッカー、ジュビロ磐田のファンの人だった。とても厳しい人だった。自分にも他の人にも。その事務長に彼が鍛えられた。人としての根本の考え方を、人との接し方を。事務室の旅行も彼が計画するようになった。事務職員での京都の旅も東京の旅も楽しかった。そして、その彼は一つ大人になって、市街地への高校へと転勤した。

春は自転車の季節、夏はトライアスロンに参加したい。プールでも泳いだ、恵まれた環境だった。空手の稽古に佐久間小学校に通った。

ＮＨＫ学園社会福祉学科に４２歳の春、入学した。これは富士鐵工時代、年功の制度が崩壊していたことがバネになっていると思う。これからは資格の時代だと、そのとき話があった。それと、母親の物忘れに、母親に少しでも息子の頑張りを見せたかった。

４３歳の夏に介護実習を佐久間の老人ホームで経験した。次の年の一月の学科の試験がある。走りながら過去問のテープを聞いた。次の年１月２５日、学科試験が愛知県の大同工業大学でおこなわれた、車で会場に行った。多くの介護福祉士の受験者がいた。受験番号を書いたハガキを手に教室を探した。やっと見つけたその教室には、私の受験番号は無かった。如何してかと思い係りの人に聞いたら、その係の人は慌てて電話した。そしたら、チョットした手違いでの間違いだった、そう言って、急遽違う教室に案内された。私は手違いで移動した教室の机でのテストとなった。はじまる前から不吉な予感がした学科試験の当日の出来事だった。

不吉な予感と、不安の中、試験は始まった。時間は刻々と過ぎていく。全の問題が終了、テスト用紙を見直して、教室を出て、車で家路に急いだ。試験の帰り途中、新城総合運動公園でジョギングをした。短い距離だけど走りたかった。ここは夜七時に閉門だ、時計を見て早めに切り上げた。

二月の吉日、吉報は届いた。嬉しかった。実技試験のために水窪の介護福祉士（自転車の仲間）の人に御願いして実技の練習をした。３月７日実技試験の日、肌寒い朝だった。この日は飯田線に乗って名古屋まで出た。試験会場は同朋大学、名古屋の駅からバスに乗った。まだ時間は早い大学の周りを散歩した。時間をつぶした。公園のベンチで将棋をするホームレスがいた。

定刻がきて大学に入り、試験前の教室に私たち介護福祉士実技受験者は集められた、一人ひとり名前を呼ばれて実技試験会場に移っていく、緊張の波はやってくる。私は、この学科試験に臨む勝負服にと、２０００年の２月２０日に、私の４０歳の誕生日に走った、青梅マラソン記念のＴシャツを羽織った。ヨッシやるゾ。

名前を呼ばれ会場に一歩入ると車いすに男子学生が座っていた。話によると女子学生より男子学生の方が、合格率が良いとのことだ。幸先はイイ

試験内容は、片麻痺の介護者を車いすに乗せ隣の部屋に試乗してボールを使ってレクレーション。だったかな～。

なんとか無事に試験は終わった。帰りに名古屋駅のホームできし麺とビールで一人反省会をした。

二月に

森町ロードレース（２１㎞）　１時間３３分４３秒

天竜杉の里マラソン(２１㎞)　１時間３９分００秒

三月に

豊橋ハーフ　　１時間４０分０１秒

貧血でタイムも落ちてきている。頑張りすぎか。走るのはボチボチとした。

年度末様々な事がある。自分は自分の道を行く。新年度が始まり。仕事の流れも流れていく。

桜の花が咲き、春の香りがし始めてくる。

四月

秋葉ダム桜マラソ　１０㎞　３９分４４秒

人生で初めて１０㎞で４０分を切った。ここ龍山村の桜マラソンは一キロごと桜の花びらをかたどったピンクの看板に距離表示がある。１キロ４分を時計で確認しながら走った。最後の坂道がランナーの我慢のしどころだった。そこを超えて時計をチラッと見た。坂道でダッシュ、ゴールテープを切った。近くに走っていた人と４０分切ったのか話してみた。自分なりに風を感じた走りだった。列に並び完走証を見てタイムを確認した。ヤッタ。

よ～し次は小笠・掛川フルマラソンで３時間半を切る、そんな目標を立てた。介護福祉士の勉強も、やるだけのことはやったし、人事をつくし天命を待つ。そんな感じ(笑)

私は次の目標に向けて走り出した。

平成１６年私４４歳の４月１２日（月曜日）夕方、ドクターヘリが学校のグランドに来た。救急車の音もけたたましく、ピー～ポーピー～ポーと。砂ほこりを上げドクターヘリはグランドに着陸した。そのとき私は養護の先生と施錠だった。夕暮れの時の出来事だった。養護の先生は廊下の窓から見えるグラウンドで忙しく働く救急隊員を見て言った。

「人の命とは、分からないですネ～。ドクターヘリは日が沈んでしまうと飛ぶことはできない。夕暮れ前で、助かる「命」もある」と。

その養護の先生は走る人で、森町ロードで入賞し野菜をゲットし喜んでいたときもある人だ。

次の日火曜日も施錠が終わり、毎週火曜日にある空手の練習に参加するため、マウンテンバイクで佐久間小学校の体育館に行った。

「オッス」頭を垂れ、体育館に入った。空手の道着の上下に着替え、帯を締めた。まだ緑帯だったかナ～。

空手の先生が

「中学生相手に組み手をやれ」と言い「オッス」と答えて、組み手をやった。そんなとき、頭の奥で、なんかおかしな気持ちが、それが痛くなり。先生に伝えた。うちの人を呼んでほしいと。

タダでない痛みがやってきた。外に出て休む、ズキズキズキ、と頭の中が痛む。鈍器で殴られたような。どうしてしまったのだろう。どうも頭の病気のようだ。携帯で１１９番をした。

「頭が痛いです。脳梗塞かも知れません。佐久間病院に行きます。それなりの用意をしてください」

家内の車に運ばれ佐久間病院に行った。ＣＴ検査が終わり、先生が言った。
「血が出でますネ～」
脳梗塞ではないのか。脳出血なのか。外は真っ暗闇だ、ドクターヘリは飛ぶことはできない。
「俺、死ぬのかナ～」
その佐久間病院は新しい佐久間病院の建設のための、Ｂ型鉄橋横の仮設の病院だった。救急車での搬送が決まった。行き先は聖隷三方原病院、救急車の車内でも道路状態は分かる曲がりくねった道、真っ直ぐな道、そのとうじは佐久間町の住民の人が救急隊員として登録していた、助手席に乗ったクリーニング屋のオジさんの大きな声が私の耳に聞こえた。記憶に残った。
天竜の町を過ぎているころだろうか、バイパスに曲がっているときだろうか、記憶が薄れていく、何か白く明るく円筒のようなものが輝いていて、その筒の中に入っていくように感じた。あれは夢だっただろうか。その白く輝く向こうに何があっただろうか、記憶が無くなっていく。
記憶が無くなって五日、土曜日の昼、自分の身体は病院のベッドの上だった。天井が見える。身体を動かそうとすると頭が痛い。目をつぶり私は、記憶の中の光り輝く、その向こうを考えた。それは半世紀前、横吹の村から戦争に行った新間徳一の光り輝く向こうに見える姿である。その人は敬礼をし、その手を静かに下ろし、その下ろした手を前に出し、その掌を拓いて「ここまで来てはいけない」と言っていたのだろうか。そこは音のない世界だった。私は薄目を開けた。白い天井が見える。
私は右手を布団から出し、ベットの手すりを掴んだ、体を起こし、両足をベッドから横に出した、床の感触が裸足の、私の足の裏に伝わる、冷たい。ベッドの手すりに力をこめ、立ち上がった。壁伝いにユックリ歩いて、病室内の洗面台に行き、そこの鏡で自分の顔を覗いた。左の頭に大きな絆創膏を貼った無精ひげの見覚えのある痩せこけた自分が鏡に映っていた。病名はクモ膜下出血だった。

リスクとベネフィット

世の中のものには、プラス面とマイナス面があります。
プラスの面をベネフィット（便益）といい、マイナス面をリスクといいます。
リスクは日本語の「危険」とは違い量的な意味で使用され、望ましくない害が起こる可能性の程度（確率）を指します。
実際に発生した時の害の大きさが異なる場合には、その大きさと発生する確率との組み合わせで定義されることもあります。
ベネフィットは大きければ大きいほど良く、リスクは小さければ小さいほど良いのです。
しかしながら、人がベネフィット得るために何らかのものを利用しようとする限り、いくらかのリスクは避けられず、それを完全に無くすことは決してできません。さらにいえば、リスクを完全に無くしてベネフィットだけを得ることは不可能です。
今日読んだ、新聞のコラムに書いてあった。
「リスク（危険性）とベネフィット（便益）」
世の中の全ての物には、必ず良い面と悪い面がある。

2012/04/12（Thu）

走ることにも、良いことも悪いことも、有るのかナ～。

次の日、日曜日、小笠・掛川マラソンはあった。ようだ。一緒に、その大会に行くはずだったラン友は、小笠・掛川マラソンの帰りに聖隷三方原病院に来てくれた。真っ赤に日に焼けた肌を見て今日は快晴だったのだなと感じた。健康で走れた時を、羨んだ。
退屈な病院での夕方、一階のホールでハーモニカのコンサートがあると院内放送で流れた、看護師に断り、そのホールに向かった。車いすの人、点滴のポールを持っている人、コンサート会場に集まっている。ハーモニカ

を持つ、その人は脳梗塞で倒れリハビリのとき、そのハーモニカを練習したという。大変だったけど、今私は、ココまで回復した。聞いてください。と、童謡「赤とんぼ」の曲が始まった。そのメロディーが流れる。ハーモニカの音が高く頭に響く。その音に絶えきれなくなり、その集まりから抜け、私は一人、病室に戻った。

夕焼け小焼けの、赤とんぼ、負われて見たのは、いつの日か♪

私は病室に帰ってベッドに横になった。病室の窓から浜松の市内の街並みがみえる。そこの家の一軒一軒に人々の生活がある。その遠くに山並みが見える。その向こうに私の家がある。

山の畑の　桑の実を　小かごに摘んだは　まぼろしか♪

脳外科の病室では、夜になると、近くの病室から唸り声が聞こえる。私なんかより大変な人がいる、眠れない長い夜がやってきた。

朝、目が覚めると。ベッドの向こうの人が、両腕を上げている、その両腕の掌を、天井に向け、グウ・パアを繰り返す。やがて、その両手の掌を親指から順番に倒していく。その人は、戦争を経験しているという。戦争から帰ってきてバアサンと見合いで一緒になり三ケ日のミカン農家を始め、働いて働いて子どもを育てたと言っていた。ミカンは収穫の時が一番忙しい。そこでミカン狩りを始めた。そのミカン狩りは、私が一番初めにヤッタ、と言っていた。

おまえは若い、ガンバレとも言った。

その人は、毎朝、グウ・パアを、手の運動を欠かさず続けている。その人から、その人が経営するミカン農園の名刺をもらった。手垢で汚れていた、その人の人生が、少し見えてきたような気がした。

病室で採血があり、その新米ナースは聖隷病院の看護学校の卒業生で、今回の採血は患者さんを相手にやるのは初めてだという。昔は生徒同士、注射の練習ができたのに、今は決まりで人形を相手の練習しかできないと言っていた。私は、光栄にも、その新米ナースの初めての人となった。隣にはベテランのナースがかまえていた。

ブスっと刺した、その注射針を何故か慌てて抜き、私の二の腕から血が噴き出た。慌てた新米ナースは、その血を素手で拭こうとしたとき。ベテランのナースが的確に処理してくれた。私も慌てた。新米ナースはもっと慌てていた。そんな失敗を繰り返し、いつしか新米ナースもベテランのナースになっていくのだろう。私は、そんな新米ナースに。ガンバレと心の中で言った。

クモ膜下出血の、術後の病院生活での日課は、水分の記録だ、出した水分（ションベン）と、摂取した水分を記録していく。水頭症の後遺症が心配のためだという。頭の病気、どんな後遺症が残るか分からないという。

くも膜下出血とは脳を保護している三つの膜のうちのくも膜という膜の下に出血がみられる状態のことを言う。その、くも膜下出血が起こると、おおざっぱに言って3人に1人が亡くなり、3人に1人に重い後遺症が残る、とネットに書いてあった。

私は、佐久間病院から聖隷三方原病院まで救急車で転送され、記憶が無くなり。その記憶のない時にクリッピング手術で一命をとりとめた。

くも膜下出血の前兆として

・血圧が激しく上昇・下降する
・急な頭痛（頭痛はそれほど強くない場合もある）
・視力低下、めまい
・吐き気や嘔吐

・意識低下や頭の違和感（モヤモヤしたりボーとする）
と上げられるが、私には前兆は感じられなかった。しかし、原因がなければ，結果（くも膜は出血）は起こらない。なんらかの原因は、あるはずだ。

頭の絆創膏を外してもらった。生々しい傷跡が頭部にある。クスリは食後に一錠、聞けば、そのクスリは胃薬だという。この病気のクスリは無い、頭部切開手術、それは胃に負担がかかるのだと、ドクターは言っていた。

聖隷三方原病院の病院食は美味しかった。毎回残さずに食べた。掃除のオバサンは下阿多古から通っているという。みんな生活のために働いている。

月末、脳外科のドクター達三人が病室を訪れる。黒い縁のメガネをかけた先頭を歩く少し背の低い先生がトップだと思う。他、二人、物腰優しそうな〇崎先生が、私の担当の先生だ。

白い巨塔、財前教授の総回診とまでは行かないにしろ、それなりの序列を、患者側から見て感じた。

その、ドクター三人が、私の病室に来て。黒い縁のメガネをかけた先生が私のカルテを見て、低い声で言った。

「退院はいつ？」「このままでは連休に入ってしまうではないか」と。

4月の終わり。急遽、退院前の最後の検査、くも膜下出血後のカテーテル検査をやるという話が〇崎先生からあった。それも明日、それにしても早い話だ。その検査には保護者の承諾がいるという。家に電話をかけ、急遽病院に来てもらった。

くも膜下出血のクリッピングの時は記憶にないので何とも感じていないのだが、今回は部分麻酔での検査だという。くも膜下出血後のカテーテル検査の時、動脈にカテーテルを通すには腕の動脈か足の付け根の動脈かの何方かだという説明だった。〇崎先生はどちらにしますか？と言った。私は出来るなら、腕にしてほしいと答えた。

くも膜下出血後のカテーテル検査は午後だ、昼ごはんは抜きだった。看護師さんが剃毛に来た。クリームを持って安全カミソリを持って。私のパジャマのズボンに手をかけ少しずり下げ、クリームを塗ろうとするとき、私は言った。

「あの～。私、腕だと言ったのですが」

その看護師は

「あ、あ～そうですか」と言って私のパジャマのズボンを上げた。

腕の毛を剃り終わり。その看護師は私に手術同意書にサインしてください。と私に同意書を渡した。

その同意書にサインするとき

「大勝負ですか。もしかして、とか」私は聞いた

看護師さんは

「動脈から通すのだから、もしかするときが、あるかもしれませんョ～(笑)」と言った。

ヒェ～。もしかしたらどうしよう。もしかしても、もしかしなくても、それをやらなければならない時もある。

私はストレッチャーに乗せられ手術室に向かった。一つ目のドアが開き、中の人が言った。

「研修医の見学は良いですか？」と、「良いです」今更断ることもできない、私はそう答えた。

手術室の中へ、そこの中央へ、テレビで見るような丸い電気がいくつもある、そんな物が光った。二か所電気が点いていない所があった。手を頭を身体を動かないように、発泡スチロールで固めた。ベルトで手術台に固定された。

まるでまな板のコイ。

注射を打ち、右手の感覚が消えていく。真上しか見ることはできない、首を横に動かすことはできない。右腕に、なんかしているような気がする。しばらくして首から上が、か～っと熱くなった。そのうちに、周りが急に騒ぎ出した。

「なんだ、なんだ」と。
私の周りに人影が無くなっていく、そう感じた。奥のガラスの外側に人が集まっているような。感じだった。何が起こったのだ。私は動くことはできない。そのうちマスクをかけた先生が来た。その目は担当の〇埼先生の目だった。私は聞いた。
「ど・う・し・た・の・ですか？」　まるで生き作りのコイ、目と口しか動かせない。
心配いりません、初めての機械なので、画像の映りがチョット。
じっと我慢で、くも膜下出血後のカテーテル検査は、終わった。身体を動かすことができない。それは苦しい、普通の生活に早く帰りたい。
病室に帰って来ると、そこには、サンドイッチと牛乳があった、朝から何も食べていない。世界で一番美味しいと感じたサンドイッチだった。
その日の夕方、私の主治医〇崎先生のくも膜下出血後のカテーテル検査の説明があった。私の頭部の写真が、その部屋にはあった。その頭部の頭の中の写真は、そこにあった。自分の血管写真はリアルにクリップがあり、その血管を動脈瘤を挟んでいた。
「明日退院してください」主治医〇崎先生は私に言った
ハヤ。いくら何でも。速いと感じた。数日前まで、もしかしたら、と不安をあおっていたのだが、明日退院。まだ傷口はジュクジュクしている。と思ったが、病院は早く出たい、とも思った。
家に電話し、迎えに来てもらうようにした。明日は先勝だから、午前中には病院を出ようとなった。次の日の朝食、聖隷三方原病院の最後の病院食には、食堂の人の配慮か、その朝食の乗っているトレーにメモ用紙があった。
【退院、おめでとうございます。こらからの人生に幸あれ。食堂従業員一同】
ありがとうございます。と心の中で唱えて一粒残らず、その最後の病院食を頂いた。

父親が病院に着いて、荷物をまとめて聖隷三方原病院を退院した。４月１３日からの１６日間の病院入院生活だった。私は表玄関から聖隷三方原病院をでた、外の暖かい風が頬をなぜた。４月も月末だ、巷では明日からゴールデンウィークだ、私はその聖隷三方原病院を振り返った。
多くの人が、その病院を利用している。病気になる人、その人を支える人、何でもない普通の暮らしが、当たり前ではない、そう感じることを私に教えてくれた。
人は人と比べ羨ましいとか感じる生き物だが。自分は自分、そう思う。しかし、そうは言っても。やはり人と比べてしまう自分がいる。自分もこれから、どの様に生きていくのだろうか。そのときには明確な答えは無かった。
しかし、私は誰かに支えられている。
聖隷三方原病院を退院して前を向いて歩き始めた。そんな私の前方から、半場の家の隣の佐々木さんがきた。
「なんだ、もう退院か～」「ハイ、これ」と封筒を渡してきた。
「おまえナ～。生きていると色んな事があるゾ～。」「これからもナ」
そう言って佐々木さんは、イイちゃ、は帰って行った。
父親の車が置いてある駐車場に行く、父親から自分の携帯を渡される。新城の中川さんに電話した。
「何とか、生きてます」と言った。
北遠に車は向かった。車窓からの景色を呆然と眺めていた。秋葉トンネルを抜け大きな秋葉ダムがわたしを迎えてくれた。秋葉ダム湖岸沿いを走る車の少し開けた窓から入る春の風が心地よかった、新緑燃える景色が美しく感じた。
家に着き居間に座り、コタツの上のチョット右側にテレビのリモコンがある。テレビを付けてみた。何でもないことが、ただ、ただ、嬉しかった。

夕ご飯、納豆を食べた、ご飯は一杯にした。ビールは飲まなかった。食後、風呂に入って、夜はテレビを観ずに寝ることにした。テレビやパソコンの画面を見ると頭が痛くなる。布団に入り考え事をしていたら、直ぐに眠りに落ちた。ぐっすり泥のように眠りに着いた。翌朝５時前には目が覚めた。

外に散歩に出た。家の横の荒れた道は、腿の筋肉が落ちている自分には思うように歩けない。長い寝たきりの状態が自分の身体を変えた。

後で父親に聞いた話だが、私が運ばれた前日、水窪からも女性が同じ病院には運ばれたらしい。その女性はベッドに横になりイビキをかいていたという。私はスヤスヤ寝ていたと父親が言っていた。その女性は目を覚まさなかったと父親が私に言った。私は生きて帰って来ることができた、そして私は今ココにいる。

佐久間部品を半周した。天竜川に飯田線の鉄橋がある、目の前には佐久間ダムの発電所がある。天竜川の水は佐久間ダムで発電し、その水は、私が今いる前の、天竜川の下を通って、私が暮らしている半場側の第二発電所に行き、そこでも発電し、その天竜川の水は西渡（にしど）の第二発電所の放水口にでる。川の流れは人の手で変えられていく。人の人生も、昔はクモ膜下出血で死んでいく人がいたのだと思う。私の血管と言う血液の流れも、決壊したところを修繕して、これからの人生を生きるキップを手に入れた。しかし、キップを手に入れることができなかった人もいる。

中部天竜駅から長野方面に向かう始発の電車が、佐久間ダム発電所の前の天竜川にかかる佐久間橋梁を走っていく。

私は、そこを走り去る、飯田線の車両が行き過ぎるのを見送って、水窪方面に向けて両手を合わせた。

何時も5月の連休はロードバイクに乗っていたのだが、今年はロードバイクで走ることもない。できない。散歩が精一杯だった。

そんなときに静岡新聞の朝刊を見た、静岡県市町村駅伝の記事があった。佐久間町の名前は無かった。水窪も龍山村も無かった。中部の町で井出君と出逢い。そんな話をした「今年は県市町村駅伝、でないダカ？」と聞いてみた。本当は参加したいようだった。上島キャンプ場で、走る仲間を集めて酒でも飲もう、そんな話があった。

上島キャンプ場には、去年駅伝を走ったメンバー、それとコーチの○川先生が集まった。後から佐久間町チームの監督の関○さんも来た。そこで今年も市町村駅伝に参加したいという話がメンバーから出た。関○さんは困っていた様子だったが、学生たちの必死の懇願に想いを感じ、重い腰を上げ「町に話してみる」と関○さんは答えた。その後二次会ということで山下マコチンの家に大人たちが流れた。そこで関○さんのおごりで江戸芝の寿司が届いた。多くの仲間との語り合い酒を飲み、これからの山間部での生活の不安が微かになくなった気がした。佐久間町に夢と希望が見えた。そんな感じがしたことを覚えている。

ところが、数日後、関○さんが町に選手の想いを伝えたが町には、その想いは届かなかったと。町では応援できないとの話しだった。そこで佐久間町最後の静岡県市町村駅伝は有志の人での選手サポートをやろう、となった。

関○さんは佐久間町体育協会の会長、その副会長その他の人に声をかけ有志が集まった。川合の○泉さん・野田の○田さん・上平山の○花さん・早瀬の○田さん、など。日曜日の朝集まって早瀬の河原に竹を取に行き、その竹で募金箱を作った。バーナーであぶった方が良いと言って、関○さんは新城に買い物に行っている奥さんに電話してバーナーを買ってくるように連絡した。数十個の募金箱が完成した、佐久間町の企業、金融機関にその募金箱を置いた。

静岡県市町村駅伝に向けての練習に佐久間町だけでなく龍山村から天竜市から参加してくれる人がいた。

第６回静岡県市町村駅伝大会、総合順位２３位　ナンバーカード５３浜松市佐久間で参加しゴールタイムが２時間３３分０７秒だった。敢闘賞を頂いた。

過去から未来に、人は繋がりの中で生きている
駅伝も、おおくの人に支えられ走っていく。

「絆」という字の、その意味は
① 馬の足などをつなぐこと。馬の足になわをからませて歩けないようにすること。また、それに用いるなわ。
② 自由に動けないように人の手足にかける鎖や枠(わく)など。手かせ。足かせ。ほだせ。ほだ。
③ 人の心や行動の自由を束縛すること。人情にひかれて、自由に行動することの障害となること。また、そのようなもの。
このような意味があるらしい。
年度末を迎え、別れの季節、施錠で学校の見回りで、ある教室に、その「絆」と言う漢字が色とりどりのチョークでデザインされて黒板に大きく書いてあった。
離任式が終わり。浜北のプラザホテルで送別会があった。その会場で離任していく、ある先生が挨拶をした。「人」という字は、支え合って人という字だという人もいるが、私には、知らない誰かに、もたれかかっているように見えてしまうんです。と、もたれかかっている人は良いが、支えている方は、たまんない。最近私は肩こりが激しい(笑)
涙有り笑いありの送別会は終わった。

駕籠に乗る人担ぐ人そのまた草鞋を作る人
世の中には様々な職業がある。

グローバルな社会、包括的な世の中、世界にも様々な国がある。ロシアがウクライナへの侵攻を始めた。

静岡新聞 2005年12月3日掲載